

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	庾信の詩 : 「清新」について
Author(s)	森野, 繁夫
Citation	中國中世文學研究 , 60 : 48 - 67
Issue Date	2012-03-27
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051437
Right	
Relation	



庾信の詩 — 「清新」について —

森野繁夫

杜甫はその「春日憶李白」詩において、李白の詩風を庾信と鮑照の詩風に比擬して次のように詠う。

白也詩無敵 白や詩は敵無し

飄然思不群 飄然として思ひは群なみならず

清新庾開府 清新なるは庾開府

俊逸鮑參軍 俊逸なるは鮑參軍

杜甫は李白の詩の發想とその表現には、庾信の詩の「清新」、鮑照の「俊逸」に通ずるものがあるといふ。杜甫は庾信の詩のどのようなところを「清新」と評し、鮑照の詩のどこを「俊逸」と評したのか。この度は庾信の詩について、それが「清新」と評された理由について調べた。

一、「清新」の意味

詩文の評語としての「清新」には、従來どのような意味が込められているのか。「清新」という評語は、「清く新しい」というありふれた評語であるためか従來あまり使われておらず、用例は多くない。

その中で晉の陸雲が兄陸機の詩文を評したものが、こ

こでは参考にならう。陸雲「與兄平原書」に次のようにある。

兄文章之高遠絕異、不可復稱言。然猶皆欲微多。但清新相接、不以此爲病耳。若復令少省、恐其妙欲不見。可復稱極。(本集)

兄の文章の高遠絶異なるは、復た稱して言う可からず。然れども猶ほ皆微や或多からんとす。但だ清新相接すれば、此を以て病やまひと爲さざるのみ。若し復た少しく省はぶかしむれば、恐らくは其の妙は見えざらんとす。復た極まれりと稱す可し。

「兄機の詩文は高遠絶異なること言うまでもないが、やはり多辯なところがある。但だ清新な表現が続いているために、それは缺點となっていない。多辯を抑えようとするれば、かえつてその文章の「妙」は失われてしまふであらう」と言う。

劉勰『文心雕龍』鎔裁 第三十二には、陸雲が兄機の文を「清新」と評したことについて、次のように述べる。

昔謝艾、王濟、西河文士。張駿以爲艾繁而不可刪、濟略而不可益。若二子者、可謂練鎔裁、而曉繁略矣。至如士衡、才優而綴辭尤繁。士龍思劣而雅好清省。及

雲之論機、亟恨其多、而稱清新相接、不以爲病。蓋崇友于耳。而文賦以爲、榛楛勿剪、庸音足曲。其識非不鑿、乃情苦芟繁也。

昔謝艾、王濟は、西河の文士なり。張駿以爲へらく「艾は繁なれども刪る可からず、濟は略なれども益す可からず」と。二子の若き者は、鎔裁に練にして、繁略に曉かなりと謂ふ可し。士衡の如きに至りては、才優れて辭を綴ること尤も繁なり。士龍は思ひは劣るも、雅り清省を好む。雲の機を論ずるに及びて、亟ば其の多きを恨む。而れども「清新相接すれば、以て病と爲さず」と稱するは、蓋し「友于を崇ぶのみ」。而るに「文賦」に以て「榛楛も剪る勿れ、庸音も曲を足す」と爲す。其の識は鑿みざるには非ず、乃ち情の繁を芟るに苦しむなり。

劉勰は、「繁なれども刪る可からず、略なれども益す可からず」という文章を是として、陸機の文は「繁」に過ぎるとしている。そうして陸雲が兄機の文を「清新相接すれば、此を以て病と爲さず」と言っているのは、「蓋し友于を崇ぶのみ」兄弟ゆえの評と見なしている。

陸雲の評の當否は別として、その「清新」とは、どのような詩文についての評であるうか。「然れども猶ほ皆微や多からんとす。但だ清新相接すれば、此を以て病と爲さざるのみ」——陸機の文は、とかく語句が多くなる傾向にあるが、それが氣にならないのは、「清新」なる

語句、表現が次々と出てくることによる。「清にして新なる」語句とは、それが使い古されたものでなく新鮮であることをいうのである。陸機の文は、従来用いられてきた表現を踏襲するのではなく、自分の見方、考え方に基づいた新鮮な発想と表現が多用されていることをいうようだ。

陸雲はまた「與兄平原書」の別の所で、陸機の文「漏刻賦」を「清工、新奇」と評して次のように言う。

漏賦可謂清工。兄頓作爾多文。而新奇乃爾。眞令人怖、不當復道作文。

「漏の賦」は清工と謂ふべし。兄は頓に爾を作るも多文なり。而るに新奇なること乃ち爾り。眞に人をして怖れしめ、當に復た作文を道ふべからざらしむ。

「漏の賦」は「清工」と評価できよう。兄はあまり時間をかけずにこれを作ったが文が多すぎる。しかし「新奇」であることは確かである。それは眞に人を怖れさせ、文を作る氣持ちを無くさせるほどのものだ」という。「清工」「新奇」は「清新」に近い評語である。

陸雲が例として挙げる陸機「漏刻賦」（「藝文類聚」卷六八）を見るに、「漏刻」の精妙なる構造と働き、及び神靈なる機能について、詳細な觀察による「天かける」発想と、新鮮な表現が多く使われている。陸雲のいう「清新」とは、それまでの文人たちによって使い古された発想、表現ではなく、陸機独自の新鮮なものであることをいうようだ。

それでは杜甫は、李白の詩のどのようなところを「清新」と評しているのか。おそらくそれは李白の詩の發想と表現に、それまでの詩人に見られない新鮮さのあることをいっているのである。「清新」という評語にそのような意味が込められているとすると、庾信の詩における「それまでの詩人に見られない新鮮さ」とは、具体的にどのような表現について言うのであろうか。因みに吉川幸次郎氏の「清新庾開府」の訳は「庾信中将がすがすがしさ」となっている。

二、庾信の詩における「清新」

杜甫の言う、庾信の「清新」なる發想、表現とは、どのような詩句についての評であらうか。庾信の詩には従来の詩人たちには見られない「新鮮な發想、表現」としてどのようなものがあるのか。

「清新」という評は、自然の風景などについてのものと思われがちであるが、そうではない。先に挙げた陸雲の用例からもわかるように、それは従来の詩人たちの作には見られなかった新鮮な發想、表現についての評であり、したがって庾信の詩賦の全てが調べの対象にならう。

1 北遷後の心情表現

この度は、庾信、北遷後の「心情の表現」について、

その發想と表現を見ていくことにする。そこには北朝(西魏、主に北周)に仕えた庾信の、嘗て経験したことのない苦難に満ちた体験が、新鮮な發想と表現によって吐露されているのではないかと推測されることによる。

祖国の梁が、侯景の亂、それに續く西魏の侵攻によって滅びた際に、庾信は首都建康の防衛という重任を受けながら、身の保全を計るあまりそれに相応しい働きができず、そのことが首都陥落、更には梁の滅亡につながった。そのことによる「慙愧の念」と、その後、祖国を滅ぼした西魏、更に北周に仕えざるを得なかった「恥辱の思い」に苛まれながら、北地での後半生を過ごした。それは精神的にも、また生活の面でも、庾信にとって初めには庾信独自の發想と表現が多く用いられているにちがいない。

「江南の人」から「關外の人」となった庾信の思いの内容を、(1)「慙愧の念」「恥辱の思い」(2)「北周における自己の存在」(3)「望郷の思い」の三点にまとめ、それぞれについて「清新」と言えそうな發想と表現を、其の詩賦から取りあげてみる。

(1) 慙愧の念、恥辱の思い

庾信は南朝梁の人であるが、首都建康が侯景の反亂軍によって包圍された時、太子(後の簡文帝)に仕えており、首都建康の令として、三千人(一に一千人)を率

いて首都南門（朱雀門）の守備についていた。しかし、我が身の安全を保とうとするあまり、敵と一戦も交えることなく撤退し、長年にわたる主恩に報いるだけの働きができなかった。建康陥落後、江を遡って二年餘の後ようやく辿り着いた江陵では、湘東王蕭繹（後の元帝）のもとで右衛將軍、散騎侍郎となったが、江陵が西魏の侵攻を受ける直前に勅使として西魏（長安）に行き、そのまま拘留されて使者としての何の働きもできなかった。

侯景の乱に際しては、長年の主恩に報いることができず、また江陵が西魏の侵攻を受けた時には元帝の使者として西魏に赴きながら国使としての務めを果たせず、梁の滅亡によって民に塗炭の苦しみを舐めさせることになった。信はそのことに重い責任を感じて、生涯「慙愧の念」を抱き続けている。

更にまた、祖国を滅ぼした国に心ならずも仕えている恥辱を、片時も忘れることはできなかった。西魏、北周に出仕したことについての懺悔は「伯夷叔齊」の故事を踏まえながら、作品の随所に述べられている。

すなわち、「謹みて司寇淮南公に贈る」詩には、

遂令忘楚操

遂に楚操を忘れしむ

何但食周薇

何ぞ但に周の薇を食ふのみならんや

「かくして私は『楚の操』を忘れてしまい、どうして『周の薇』を食べて生き延びただけであろうか。「楚操」は、南方楚國の歌で、晋に囚われていた楚人が、いつまでも楚の歌を忘れなかったという故事（『左氏伝』

成公九年）を踏まえ、自分はそうではなかったという。

「周薇」は、殷末周初の「伯夷、叔齊」の故事（『史記』伯夷列傳）による。伯夷と叔齊は、主君である殷王を討伐した周の粟を食わずと言い、西山に隠れて薇を食べていたが、やがて餓死した。庾信は「私は周の薇を食べて生き延びただけでなく、更にその国に仕えて『楚の操』まで忘れてしまった」と歎く。

「枯樹賦」においても、「根を抜かれ傷つけられ」た瀕死の巨木を自分に喩えながら、

況復風雲不感 況んや復た風雲にも感せず

羈旅無歸 羈旅にありて歸る無きをや

未能採葛 未だ葛を採る能はざるに

還成食薇 還つて薇を食ふを成す

沈淪窮巷 窮巷に沈淪し

蕪没荆扉 荆扉に蕪没す

既傷揺落 既に揺落を傷み

彌嗟變衰 彌よ變衰を嗟く

「今や風雲の機にも感應しなくなり、國に歸ることもできなくなつた羈旅の身の上。使節としての役目も果たせず、かえつて其の地で薇を食べている恥ずかしさ。路地に裏に落ちぶれ、荆の戸の奥に埋没し、身の衰えを嘆いて過ぐす日々」と述べ、「樹すら猶ほ此の如し、人何を以てか堪へん」と結ぶ。

また「哀江南賦」序でも、

畏南山之雨、忽踐秦庭。讓東海之濱、遂浪周粟。

南山の雨を畏るるも、忽ち秦の庭を踐む。
東海の濱を譲るや、遂に周の粟を喰ふ。

「畏南山之雨、忽踐秦庭」南山の黒豹は、長雨が降る時には毛が傷むのを恐れて隠れているという(『列女傳』賢明)。それにもかかわらず私は、西魏の朝廷に使者として出向いてしまった。

「私は『南山の雨』に濡れることを畏れていながらも、西魏の朝廷に出向き、やがて西魏が周に國を譲ると、私は周の粟を食うことになってしまった」と述べる。

このように自分を責め続ける庾信は、今さら江南には恥ずかしくてとでも歸れる身ではないと言う。

信年始二毛、即逢喪亂、藐是流離、至于暮齒。

燕譚遠別、悲不自勝。楚老相逢、泣將何及。

信 年始めて二毛、即ち喪亂に逢ひ、
貌かに是れ流離して、暮齒に至る。

「燕譚」のごとく遠く別れ、悲しみ 自ら勝たず。

楚老 相ひ逢ひ、泣くも將た何ぞ及ばん。

「楚老相逢、泣將何及」は、漢末、楚の人で光祿大夫であつた龔勝の故事。王莽に召されたが二主に仕えずとして断り、自ら餓死した。その死後、楚の父老が弔問に訪れ、これを哭して甚だ哀しんだという(『漢書』龔勝傳)。ただここでは、「泣くのは「楚老」ではなく庾信のようだ。故事の内容をそのままに使わず、庾信流に手を加えたものであろう。

「慙愧の念」「恥辱の思い」に辛うじて耐えている自

分の精神状態、言葉に言い尽くせぬ思いを、庾信はどのように表現しているか。「擬詠懷詩二十七首」を見てみよう。

① 無悶無不悶

有待何可待

昏昏如坐霧

漫漫疑行海

千年水未清

一代人先改

昔日東陵侯

惟見瓜園在

悶もたゆること無きか 悶えざるは無し

待つこと有るか 何をか待つ可き

昏昏として霧に坐するが如く

漫漫として海を行くかと疑はる

千年 水未だ清まざるに

一代にして人は先に改まる

昔日の東陵侯

惟だ 瓜園の在るを見るのみ

(第24首 全8句)

悶えることは無いのか 悶えないことは無い

期待することは有るか 何の期待も無い

暗暗くらくらとして霧の中に坐っているかのようであり

あてもなく海の上を漂っているのではと疑われる

千年経っても黄河の水は未だ澄まないのに

僅か一代で人の世は先に變わってしまった

その昔の 東陽侯

今はただ 瓜畑だけが残っている

「無悶無不悶」「易』乾卦、文言傳に「不易乎世、

不成乎名、遯世無悶、不見是而無悶。樂則行之、憂

則違之。確乎其不可拔、潜龍也」(世の移り変わり

によって主義を)易へず、(世間に)名を成さず、

世を遯れて悶ゆる無く、是とせ見れざるも悶ゆる無

し。樂しめば則ち之を行ひ、憂ふれば則ち之を違る。確乎として其れ抜く可からざるは、潜龍なり」とある。しかしとても『易』にあるように全てを超越することは自分にはできない。「有待何可待」それなら何か考えていることが有るのかという、何の期待も無い。梁の再興をはじめとして、期待することは今や全て無くなった。「昏昏如坐霧」周りは「昏昏」暗々として何も見えず、霧の中に独り坐っているかのようだ。「漫漫疑行海」海は漫々と廣がり、自分が何處に流れつくのやら全く見当もつかない。「悶えることは無いのか、一悶えないことは無い。それでは何か期待することが有るのか、一何の期待も無い。ただ暗暗とした霧の中に坐っているようであり、あてもなく海の上を漂っているような思いだ」一慙愧の念と恥辱の思いに今も苛まれ續けており、自分がどうすればよいのか、進むべき方向も何もわからない。その心を整理し思いをまとめて立ち直ろうとするけれどもどうにもならない心理状態を、「昏昏として霧の中に坐っているようであり、漫漫く海を漂っているようだ」と喩えている。

② 懷抱獨愔愔

平生何所論 懷抱獨り愔愔たり
由來千種意 平生何の論ずる所ぞ
併是桃花源 併びに是れ桃花源

穀皮兩書帙 穀皮こくひ兩書帙りょうしょち
壺盧一酒樽 壺盧こぼろ一酒樽いっしゆん
自知費天下 自みづか知ち費ひ天下てんか
也復何足言 也また復また何なに足たり言いふに足らんと
(第25首 全8句)

胸の中はただ愔愔と闇のなか

平生何の論ずることも無い

これまであれもこれもと千もの願いがあつたが

全てそれらは 桃花源

穀皮で作った二つの書帙

瓢箪の酒壺一つ

天下のために心を費やすことなど

何の意味もないことと悟つた

「懷抱獨愔愔」胸の中は獨だ暗々としているばかり。

「愔愔」は、第一首に「素索無眞氣、昏昏有俗心」

(素索として眞氣無く、昏昏として俗心有り)。既に

挙げた第二四首に「愔愔如坐霧、漫漫疑行海」(昏昏

として霧に坐するが如く、漫漫として海を行くかと疑ふ)のように使われている。「平生何所論」い

つも「懷抱獨愔愔」といった状態で、何の望みも無いし、論ずる氣持ちも無い。「由來千種意、併是桃

桃花源」これまで多くの爲すべきこと、願いを持つて

いたが、それらは全て実現されることなく、陶淵明

の描いた「桃花源」のように、儂い夢のようなもの

となつてしまつた。

胸の中は、ただ昏昏と闇のなか。今となつては何の言うべきことも無い。北地に來てからこれまで、果たさねばならぬことは数々あつたが、今やそれらはあの「桃花源」同様に全て儂いものとなつた。為すべきことも為し得ず、慙愧の思い、耐え難い恥辱のあまり、何をする氣力も無くなつてゐる状態を、「獨昏昏」（ただ暗々とした闇のなか）と表現している。

「桃花源」は、人間の前に一時姿を現した村であるが、今ではどこを捜してもそれを見つけないことではできない、という意味をこめて使つてゐる。陶淵明の「桃花源」故事を使つた新しい用法であらう。

この「桃花源」故事は、庾信の「徐報使來止得一相見」「徐報使の來るも止だ一たび相見ふを得ず」の詩にも、次のように使われている。

一面還千里 一たび面ひて千里に還る

相思那得論 相思ふも那ぞ論ずるを得ん

更尋終不見 更に尋ぬれば終に見へず

無異桃花源 桃花源に異なる無し

「更めて徐君を尋ねたが、もはやその姿は見えず、それはあの桃花源と異なることはなかつた。」「徐報使」は、嘗て梁朝で同僚であつた徐陵のことであらう。時期はわからないが、国使として北周に來たことがあつたようだ。

「桃花源」はまた、「奉報趙王惠酒詩」（趙王の酒を惠まるるに報じ奉る詩）、「詠畫屏風詩」（畫屏風を詠ずる詩其の四）にも使われている。

奉報趙王惠酒

梁王修竹園 梁王の修竹園

冠蓋風塵喧 冠蓋風塵 喧かまひす

行人忽枉道 行人は忽ち道を枉げまし

直進桃花源 直ちに進む 桃花源

趙王からの酒を携えた使者が、わざわざ道を枉げて我が家に來られた。ここでは「今では、どこをどんなに捜しても見つけることはできない」という意味ではなく、「世間を避けて住んでいる場所」に喩えている。

詠畫屏風詩（其の四）

逍遙遊桂苑 逍遙して桂苑に遊び

寂絕想桃源 寂絶 桃源を想ふ

挾石分花逕 挾き石は 花逕を分ち

長橋映水門 長き橋は 水門に映ず

あてもなく桂苑をぶらつけば、俗世を離れて「桃源」を思わせる。狭い石が、花咲く逕を分けており、長い橋が水門に映えている。ここでは「桃花源」は「俗世間を離れた境地」を意味するのであらう。

③ 尋思萬戸侯 尋思す 萬戸侯

中夜忽然愁 中夜 忽然として愁ふ

琴聲遍屋裏 琴聲 屋裏に遍く

書卷滿牀頭 書卷 牀頭に滿つ

雖言夢蝴蝶 蝴蝶を夢むと言ふと雖も
定自非莊周 定自り莊周に非ず

残月如初月 残月は初月の如く

新秋似舊秋 新秋は舊秋に似たり

露泣連珠下 露は泣きて連珠下ち

螢飄碎火流 螢は飄ひて碎火流る

樂天乃知命 天を樂しみて乃ち命を知ると

何時能不憂 何れの時か能く憂へざらん

(第18首 全12句)

「萬戸侯を志していた頃のことを思い、夜更けて俄かに愁いがつる。琴の音は部屋の中にひろがり、書巻は牀のほとりに満ちているけれど」——「胡蝶の夢」ということも言われてはいるが、本より自分は莊周のようにはなれそうにない。残月は初月のようであり、今年の秋も往年の秋と變りはない。露の涙は珠を連ねたように垂れ、飄う螢は碎け散る火のように流れる。「樂天知命」というけれど、何時になつたら其のような心境になれるのであろうか。

「雖言夢蝴蝶、定自非莊周」『莊子』齊物論篇に「昔者莊周、夢に胡蝶と爲る。栩栩然として胡蝶なり。自ら樂しみて志に適ふかな。周なるを知らざるなり。

俄然として覺むれば、則ち遽遽然として周なり。知らず周の夢に胡蝶と爲るか、胡蝶の夢に周と爲るかを」とある。ここでは庾信は、自分は定自り莊周ではないから、その超脱した境地には到底至れそうにないと言う。「残月如初月」「残月」は、殘缺した月。有明の月。「初月」は初生の月。新月。殘

月と初月の区別もつかない。變化のない日々が、ただ繰り返されるだけだ。「新秋似舊秋」今年の秋も往年の秋も、變わりはない。年々同じような状態が繰り返されていくだけ。「露泣連珠下、螢飄碎火流」秋の露は涙のように、珠を連ねたように滴り落ちる。螢の漂うことは、碎け散る火が流れるようだ。いずれも慙愧、恥辱の思いに耐えかねて、夜更けに俄にのる愁いが重ねられているのである。

莊子の「蝴蝶の夢」の典故に拠りながらも、「自分はとも莊周のように現実の出来事を忘れることはできない。夢の中でさえも慙愧の念、恥辱の思いを忘れることはできない」と、故事の内容とは逆のことを言う。

また「残月」と「初月」、「新秋」と「舊秋」をそれぞれ対比させて、「慙愧、恥辱」の思いのうちに、月日がただ空しく過ぎてゆくことを表現している。「露泣連珠下、螢飄碎火流」の「涙は連ねたる珠のごとく下る」「螢は碎け散る火のごとく流る」とは、激しい喩えであり、そこには「慙愧、恥辱」の思いが重ねられているようだ。

④ 在死猶可忍 死に在りてすら猶ほ忍ぶ可し
爲辱豈不寬 辱しめ爲るること豈に寬くせざらん

古人持此性 古人此の性を持するも
遂有不能安 遂に能く安んぜざる有り

其面雖可熱 其の面おもて熱かる可しと雖も
其心長自寒 其の心は長く自おのづから寒し

(第20首。全18句の①～⑥)

死でさえも耐え忍ぶことができるのだから、辱められることなどどうして我慢できぬことがあるうか。しかし古人はそのことがわかつていながらも死を選んだ。恥辱の苦しみに耐えることができなかつたのであろう。しかし私は恥ずかしさのあまり顔が火照るような思いがあつても、その心はいつも冷めている。死にまさる恥辱に耐えながら、これまでの自己の行為を冷静に見ているというのであろう。

「在死猶可忍、爲辱豈不寛」死でさえも忍ぶことができるのであるから、恥辱を忍ぶことがどうしてできないことがあるう。似た表現が『晉書』宣帝紀に見える。「天子執帝手、目齊王曰、以後事相託。死乃復可忍、吾忍死待君、得相見、無所復恨矣」(天子は帝の手を執り、齊王を目して曰く「後事を以て相ひ託さん。死すら乃ち復た忍ぶ可し、吾は死を忍びて君を待つ。相ひ見ふを得たれば、復た恨む所無し」と)。「古人持此性、遂有不能安」古人は其のことを知りながらも、恥辱に耐えかねて死を選ぶ者がいた。「其面雖可熱、其心長自寒」「其面」とは、作者庾信の面。自分の場合を思うと、報復もできず、恥辱に甘んじたまま、命を長らえていることで顔が熱くなってくるが、心はいつも冷え冷えと醒

めている。

祖國を滅ぼした敵に仕えている恥辱と、慙愧の思いに耐え忍んでいる心情の表現であり、恥ずかしさのために顔が火照るが、心は自分を誤魔化すことなく、現実を直視していつも冷めている。しかしそのために、いつまでもそこから抜け出せないでいる状態だというのであるう。

庾信が擬えた魏晉の間の人阮籍「詠懷詩」(『文選』卷二三)では、魏に代わつて政權を握らんとする司馬氏の專横を嘆きつつも、禍患が身に及ぶ懼れが詠われているが、それを自然の風景に託したり神女説話に喩えたりして、眞意を巧みに裏面に隠した詠懷となつている。

『文選』李善注には次のようにある。

詠懷者、謂人情懷。籍於魏末晉文之代、常慮禍患及己、故有此詩。多刺時人無故舊之情、逐勢利而已。觀其體趣、實謂幽深。非夫作者、不能探測之。

詠懷とは、人の情懷を謂う。籍は魏末晉文の代に於て、常に禍患の己に及ぶを慮り、故に此の詩有り。多く時人に故舊の情無くして、勢利を逐ふのみを刺す。其の體趣を觀るに、實に幽深なるを謂ふ。夫の作者に非ずんば、之を探測する能はず。

庾信の「擬詠懷詩」はこれとは異なり、慙愧の念、恥辱の思いに苛まれながらも、それに耐えて生きる苦しさ、その心のうちを、自分の言葉で有りのままに伝えようとしてゐる。すなわち、今後何を、どうすればよいのか、

心のうちを整理することもできなくなっている自分の精神状態を、爲す術も、論ずる言葉も無く、獨り「暗闇の中」で、ただぼんやりと坐っているようだ、と表現しており、更にそれは「昏昏」として霧の中に坐っているようであり、漫漫く海を漂っているようでもある」と喩える。

また、恥辱に耐えて生きていくのは、死にもまさる苦しみであることを述べたうえで、「其面雖可熱、其心長自寒」（其の面熱かる可しと雖も、其の心は長く自から寒し）と、現在の状態を招いた自分の行動を冷静に見つめている。そうして、そのような状態のまま月日が空しく過ぎていく様子を、「殘月如初月、新秋似舊秋」（殘月は初月の如く、新秋は舊秋に似たり）と詠う。

いずれもその時の自分の精神状態を、独自の發想による的確な喩えによって有りのままに表現せんとしている。

使われている故事、典故についても新しさが見られる。

・ 由來千種意、併是桃花源。

「桃花源」は、宋、陶淵明の「桃花源記」に據るもので、これまで考えていたことが全て空しいものとなつてしまつた意を表す。庾信が使い始めた新しい故事であるう。

・ 無悶無不悶、有待何可待。

『易』には「世の移り変わりによつて主義を」易へず、（世間に）名を成さず、世を遷れて悶ゆる無く、是とせ見れざるも悶ゆる無し。樂しめば則ち之を行ひ、憂ふれば

則ち之を違ふ。確乎として其れ抜く可からざるは、潜龍なり」とあるが、自分にはそうはできないと、典故を踏みながらそれを一ひねりして逆のことを言う。庾信には此のような使い方が多い。次の「胡蝶の夢」も同じ。

・ 雖言夢蝴蝶、定自非莊周。

「胡蝶の夢」は、「莊周」の故事。ここではそれを踏まえながら逆にひねつて、今の自分はとてもそのような心境にはなれないことを強調している。新しい典故の使用、従来使われている典故の応用によつて、より確かに心情を表現せんとしている。

(2) 北周における自己の存在について

西魏、更に北周に仕え、慙愧の念と異朝に仕える恥辱の思いの中で、生氣を失いかけている自分。また北周の臣になりきれないでいるために、政府の重要な地位につけず、自分の能力を發揮することができないでいる状態。また南朝梁での榮光の日々を忘れることができず、北周での扱いに心安らかでない己。庾信はそのような状態を、「半死半生の樹」「祀り上げられた寶鷄」また「故時の將軍」などに喩えている。

① 半死半生の樹

その作品のなかで彼は、北周における自分を「半死半生の樹」に喩えている。生氣を失つて、かろうじて生き

長らえていられるだけの樹であつてみれば、あとはただ枯死が待つていられるだけであつた。

その「枯樹賦」では、晉の東陽太守殷仲文が、庭の半死半生の槐樹を眺めて「此の樹婆娑たり、生意盡きたり」と言つたということから始めて、その結びに、

桓玄歎曰、昔年種柳、依依漢南、今看揺落、悽愴江潭。樹猶如此、人何以堪。

桓温歎じて曰く「昔年種えし柳、漢南に依依たり。今看るに揺落し、江潭に悽愴たり。樹すら猶ほ此の如し、人何を以て堪へんや」と。

と述べている。これはまさに庾信自身の身の上について言つたものである。

別のところではまた次のように詠じている。

獨憐生意盡 獨り憐れむ 生意の盡きたるを
空驚槐樹衰 空しく驚く 槐樹の衰ふるを

(詠懷詩 其二十一)

交讓未全死 交讓 未だ全くは死せず
梧桐唯半生 梧桐 唯だ半ば生くるのみ

(慨然成詠「詩」)

このように「空心」生氣の失われてしまつた樹のような庾信ではあつたが、しかし「半死半生」のままではなかつた。「半死半生の樹」や「枯樹」は従来使われていた語であるが、彼の場合はそれに喩えただけではない。

「半死半生の枯樹」にも、猶お時に「生氣」が蘇ることを言う。

值熱花無氣 熱に値ひて 花に氣無きも
逢風水不平 風に逢へば 水は平らかならず

(「慨然成詠」)

暑さのために花には生氣が無くなつていゝが、風に逢えば水面には波が立つ。すなわち慙愧の念と祖国を滅ぼした敵に仕えていゝ恥辱が、折に触れて頭を擡げるといゝ。同様の思ひは、次のようにも詠われていゝ。

古槐時變火 古き槐も時に火に變じ
枯楓乍落膠 枯れし楓も乍いは膠を落とす

(「園庭」詩)

「枯れかかつた古槐も時に擦れて火を出すこともあり、枯れた楓も樹脂を垂らすことがある」

圓珠墜晚菊 圓き珠は 晚菊に墜ち

細火落空槐 細き火は 空槐に落つ (「山齋」詩)

「圓い露の珠が遅咲きの菊に降り、細かな火が槐の空洞に落ちていゝ。」

これらは、折に触れて湧いてくる慙愧の念、恥辱の思ひに耐えながら、このままでは終わるわけにはいかにない、と、「枯樹」同然でありながら時に生氣を蘇らせる自分を喩えていゝのであろう。

②「祀り上げられた寶鶏」

庾信は北遷後、出仕を迫る西魏に對する「三年囚於別館」の抵抗の後、已むを得ず西魏、更に北周に仕えることになつたが、同じく北に連行された江南の知識人、高

官たちのようには従順でなかった。祖国 梁滅亡の際に其の重責を果たせなかったことによる慙愧の念、また祖国を滅ぼした異朝に仕える恥辱に苛まれ、事ここに至っては報復もかなわぬことになった歎きを、出仕の後も詩に詠い續けていた。

そのためであろう、北周側は庾信の詩文の才は高く評価しながらも、政治の面ではそうでもなかった。王侯の文會や宴席に招かれることは屢々であったが、同じく北遷した王褒のように帝の側近として宮中での會議に加えられることはなく、行政面の官職や宮中の閑職を與えられることが多かった。

庾信としては、無能で何の役にも立たない「曲轅の樹」（『莊子』人間世篇）として生きることに努めながらも、政治の面で重用されないことについては不満であったようだ。それは確かに矛盾したことであるが、梁朝での実績に拠つて己の秀才と政治能力を自負している庾信としては当然の思いであつたろう。彼はそのような我が身を「慨然成詠」詩において「祀り上げられて鳴き声もあげられない寶鷄」に喩えている。

新春光景麗

新春 光景 麗はしきも

遊子離別情

遊子 離別の情あり

交譲未全死

交譲 未だ全くは死せず

梧桐唯半生

梧桐 唯だ半ば生くるのみ

值熱花無氣

熱に値ひて 花に氣 無きも

逢風水不平

風に逢へば 水は平らかならず

寶鷄雖有祀

寶鷄 祀らるる有りと雖も

何時能更鳴

何れの時か 能く更に鳴かん（全8句）

「新春となつて日の光は麗わしくても、旅人である私には離別の情だけが付きまとう。交譲の木のように 未だ全くは死んでおらず、梧桐のように ただ半ば生きているだけ。しかし、熱に當つて花には生氣が無くなつても、風に逢えば水面には波が立ち安らかではない。寶鷄のように祀り上げられているけれども、自由に鳴き声を挙げられるのは何時のことであろうか」と言う。

「寶鷄」として祀られることについては、「西京賦」に「陳寶鳴鷄在焉」（陳寶の鳴鷄は焉に在り）とあり、その李善注に「漢書に曰く、秦の文公は石の若きものを陳倉の坂城に獲て之を祠る。其の神は光輝ありて流星の若し。其の聲は殷殷として野鷄のごとく夜に鳴く。一太牢を以て之を祠り、名づけて陳寶と曰ふ」とある。庾信は此の故事を踏まえながら、自分の不遇、不満に合わせて「寶鷄雖有祀、何時能更鳴」と、祀りあげられているだけで「殷殷」たる聲を上げられないでいる「寶鷄」に変えている。

③「故時の將軍」

北周における自分の存在については、また「故將軍」に喩えている。「奉和趙王西京路春旦」詩に言う。

鳥鳴還獨解

鳥の鳴くや 還ほ獨りは解し

花開先自薰

花の開くや 先づ 自ら薫る

誰知瀟陵下 誰か知らん瀟陵の下

猶有故將軍 猶ほ故の將軍の有るを

(全18句の⑬～⑱)

「鳥が鳴けばその思いを解する人が獨りでも居るものなのに、花が開けば先ず薫りが傳わるものを。誰が知ろうか瀟陵のもとに、猶ほ故の將軍が留められていることを」と詠う。「鳥鳴還獨解、花開先自薫」とは、その後の「誰知瀟陵下、猶有故將軍」二句を導くための喩えであるが、先例は無いようだ。「故將軍」は、漢の李廣のこと。李廣が官を辭して退居していた時、狩獵で歸りが夜遅くなり、瀟陵の門から城内に入ろうとすると亭尉に通行を拒否された。従者が「是れ故の李將軍なり」と言うと、尉は「今の將軍すら尚ほ夜行する能はず。何ぞ乃ち故なるをや」と言つて通さなかつたため、李廣は亭の側で夜を過ぐすことになつたという。

庾信は梁の右衛將軍であつたので、李廣將軍にたとへた。ここでは其の故事を踏まえて「自分は長安では『故時の將軍』のような無力な存在なのだ」と言う。この「故將軍」も、庾信が使い始めた故事ではなからうか。

「故將軍」は「哀江南賦」の結びにも使われている。

幕府大將軍之愛客 幕府大將軍の客を愛し

丞相平津侯之待士 丞相平津侯の士を待つ

見鐘鼎於金張 鐘鼎を金・張に見

聞絃歌於許史 絃歌を許・史に聞く

豈知瀟陵夜獵 豈に知らんや瀟陵の夜獵

猶是故時將軍 猶ほ是れ故時の將軍なるを

咸陽之布衣 咸陽の布衣なるは

非獨思歸王子 獨り歸を思ふ王子のみに非ず

私は「金氏・張氏」や「許氏・史氏」など、將侯顯貴の宴席に招かれてはいるが、ただ長安に留められている「故時の將軍」の如き無力な存在なのだ、と。

「咸陽之布衣、非獨思歸王子」「思歸王子」は楚の頃襄王の太子のこと。人質として秦に留められていた時、「思歸之歌」を作つて「洞庭兮木秋、涇陽兮草衰。去千乘之家國、作咸陽之布衣」(洞庭兮木は秋となり、涇陽草は衰ふならん。千乗の家國を去りて、咸陽の布衣と作る)と詠んだ。この「思歸王子」には、梁の滅亡時に長安に連行された梁王室の「王子」らも含めているのであろう。

「慙愧の念」と「異朝に仕える恥辱の思い」の中で、北周の臣になりきれないために政治面の実力を示すことができないうる自分。それはまさに「枯樹」に等しい存在であつたが、まだ枯れきつてはいなかつた。適當なところで現状に妥協したくなることもあつたであろうが、それは無理であつたようだ。時に湧いてくる生氣を、庾信は適切な喩えを使つて表現している。

また、北周の忠実なる臣になりきれないことで、政治面で重要な地位につけられないでいる自分を、従來使われている典故の内容を逆の方向へ導いて、「祀り上げられた寶鷄」に喩え、また、詩文の能力だけを利用して、

政治面の實權を持たせようとしな北周に對する不満を「故時の將軍」の如き存在と喩えてゐる。これらはいずれも「清新」なる表現と言へるのではなからうか。

(3) 望郷の念

庾信は「望郷の詩人」と称されるように、故郷の江南への思いを詠い續けてゐる。それは南に歸る人を送る詩や述懐の作に多く見られる。送別詩では次のような例がある。

① 關山負雪行 關山は雪を負ひて行き

河水乘氷渡 河水は氷に乗りて渡らん

願子著朱鷺 願はくは子の朱鷺に著くも

知余在玄菟 余の玄菟に在るを知らんことを

(張洗馬樞に別る)

「どうか朱鷺みなみに歸られても、私が玄菟きたに留まつてゐることを忘れないでほしい」「朱鷺」は江南の地、「玄菟」は北周の地を意味する。

② 客遊経歲月 客遊 歲月を経

羈旅故情多 羈旅 故情多し

近學衡陽雁 近ごろ衡陽の雁を學び

秋分俱渡河 秋分には俱に河を渡る

(和侃法師「三絶 其二」)

「他國に在つて長い歲月が経ち、旅にあつて昔のことは

かりが思われる。近頃は衡陽の雁を真似てか、秋になると誰もが河を渡つて南に歸つてゆくものを」

③ 迴首河隄望 首こうべを迴めぐらせて河隄を望み

眷眷嗟離絶 眷眷として離絶を嗟なげく

誰言舊國人 誰か言ふ舊國の人

到在他郷別 到つて他郷に在りて別ると

(和侃法師「三絶 其三」)

「あと振り返つて河の隄を望み、名残を惜しんで離絶わかれを嗟なげく。同郷の者でありながら何でまた、他國まで来て別れなければならぬのか」

④ 藏啼留送別 藏しのびな啼きし留まりて別れを送り

拭淚強相參 涙を拭ひ強ひて相參まゐず

誰言畜衫袖 誰か言ふ衫袖に畜たくめよと

長代手中冷 長く代へんや手中の冷 (贈別)

「忍び泣きしながら此の地に留まつて送別し、涙を拭いながら強いてここにやつてきた。誰が言うのか袖の中に収めたらと、涙に濡れた手中の布巾を何時までも代えはしない」

⑤ 離期定已促 離期 定まりて已に促す

別淚轉無從 別淚 轉た從よ無し

惟愁郭門外 惟だ愁ふ郭門の外

應足數株松 應まさに數株の松を足たすべきなるを

〔周尚書弘正を送る〕二首 其二

「此の地で生を終え、ただ郭門の外の墓地に數本の松が植え足されるだけであるのが悲しい」すなわち自分は此の關外の地で生涯を終えることになるであろう」と詠う。周弘正は庾信の友で、北周の武帝元年（五六〇）梁の後に興った陳の使節として長安に至り、三年後の保定二年（五六二）春に歸國した。

⑥ 離關一長望 關を離れて一たび長望すれば

別恨幾重愁 別れの恨みは幾重にも愁はし

無妨對春日 春日に對ふを妨ぐる無きも

懷抱只言秋 懷抱は只だ言れ秋なり（和庾七）

「春の日が來ないことはないけれど、胸の内はいつも秋の愁いに閉ざされている」

述懷の作では次のように詠う。

① 是以烏江艦 是を以て烏江の艦に

知無路可歸 路の歸る可き無きを知る

白雁抱書 白雁の書を抱くも

定無家可寄 定めて家の寄す可き無からん

〔擬連珠〕（27）

「烏江艦」は、烏江のほとりでの項羽の故事（『史記』項羽本紀）によつてゐる。項羽は烏江の亭長の用意してくれた舟に乗らず「縦い江東の父兄、憐れみて我を王とするとも、我は何の面目ありてか之に見はん。縦い彼

言はずとも、籍、獨り心に愧ぢざらんや」と言つて、江南へ歸るのを諦めた。「白雁抱書」は、匈奴に抑留されていた蘇武が雁の足に手紙を付けて故國に自分の生存を知らせ、やがて歸國することができたという故事（『漢書』蘇武傳）を踏まえるが、庾信は「白雁に手紙を託したところで、自分には届けるべき家も既に無いであろう」と、例によつて故事を踏まえて逆の意を述べる。

② 冥漠爾遊岱 冥漠として爾は岱に遊ぎ

淒涼余向秦 淒涼として余は秦に向かふ

雖言異生死 生死を異にすと云ふと雖も

同是不歸人 同じく是れ不歸の人

（和王少保遙傷周處士）

「周處士」は周弘讓のことで周弘正の弟。北周、建徳元年（五七二、庾信六〇歳）頃亡くなつた。王褒がその死を傷んだ詩に和した作。「弘讓は死んで岱山に行き、自分は秦、北地に向かった。生と死の違ひはあつても、同じく『不歸の人』なのだ」

③ 抱松傷別鶴 松を抱きて別鶴 傷み

向鏡絕孤鸞 鏡に向ひて孤鸞 絶ゆ

不言登隴首 言はずや隴首に登ると

惟得望長安 惟だ長安を望むを得るのみ

〔擬詠懷詩〕其の22）

松を抱いて「傷」んでゐる「別鶴」も、鏡に向かつて息

「絶」えている「孤鸞」も庾信。獨り北地にとり残されてしまった自分。「隴山の上からは長安を望むことはできても、遙かなる江南の地は更にその彼方にある」

④ 壮情已消歇 壮情 已に消歇きえつき
雄圖不復申 雄圖 復た申まをびず

移住華陰下 華陰の下に移り住み
終為關外人 終に關外の人と為る

「擬詠懷詩」其5（全10句の⑦～⑩）

「壮情は已に消え歇きてしまい、雄圖ももはや伸ばすことはかなわぬ。華陰のもとに移り住んで、終に關外の人になってしまった」

⑤ 南冠今別楚 南冠 今や楚に別れ

荆玉遂遊秦 荆玉 遂に秦に遊ぶ

倘使如楊僕 倘使たかひ楊僕の如くすると

寧為關外人 寧なほぞ關外の人と為らん

「率爾 詠を成す」

「あの楊僕のように、どのような事をしてでも『關外の人』となるべきではなかったのに。」

「楊僕」漢の人。武帝の時に樓船將軍となつて数しばしば大功を立てたが、函谷關が弘農郡に在つて自分が關外の民になるのを恥じ、上書して許され關を新安に徙した。（『蒙求』楊僕移關）

以上、いずれも「望郷の念」とはいつても、既に歸郷を諦めているような内容であり、とりわけ述懐の作ではそのように感じられる。おそらく庾信は初めの頃は歸郷の望みをもつていたであろうが、歳を経るにつれてその望みははかなくなり、次第に諦めの思いが強くなつていったのではなからうか。その理由はやはり「哀江南賦」序に「楚老 相逢あひまひ、泣くも將はた何ぞ及ばん」楚の父老に逢つて懺悔の涙を流したところで、どうなるものでもない、と述べているように、今さら江南の人たちに合わせる顔が無いと考えたためである。それは既に挙げた「擬連珠」（27）の「是以烏江しよ艦せふ、知無路可歸」（是を以て烏江の艦せふに、路の歸る可き無きを知る）からも読みとれるように、「歸りたい、しかしながら歸れない」という、つらい状態で在った。

また、庾信の歸南の願いを阻んでいたのは、北周が彼の歸國を認めようとしなかったことであつた。北周、武帝の建德四年（五七五）庾信六三歳のとき、陳との國交が開かれ、その要求で北に連行されていた南人高官十数人の歸南が認められたが、庾信と王褒だけは認められなかった。王褒はその文才と政才のゆえであり、庾信は文才ゆえであつたろう。王褒、庾信ともに、今や北周を代表する知識人、文人とされておられ、南に返すつもりは全く無かつた。

「歸りたい、しかし歸れない」という自分の中の葛藤と、歸南を認めようとしな北周のために、それは殆ど

不可能な状態であったが、そのことで江南の地に寄せる
思いは更に深まったことであろう。

所詮かなわぬ願いとわかつていながらも、なお抑えきれない望郷の念。その空しさ、切なさは、既に見てきたように、送別、望郷の場面に應じて、様々に詠われている。その江南への思い、獨り北地に残される孤獨のつらさは、従来使われてきたような発想や表現では言い表すことは難しかった。庾信は、それぞれの場面に応じた発想と表現を通して、その「望郷の念」の深さを表現せんとしている。

二、結び

言い盡くせぬその江南への懐いは、「慙愧の念」「異朝に仕える恥辱」の苦しみや、「半死半生」の樹の如き身の歎き、北周における「祀りあげられた寶鷄」「故時の將軍」同様の扱いについての不満とともに、亡國ゆえの「悲哀」として庾信の心の底に深く沈澱していったのであるう。「哀江南賦」序には、作成の意図が次のように述べられている。

畏南山之雨 「南山の雨を畏」るるも

忽踐秦庭 忽ち秦庭を踐む

讓東海之濱 東海の濱を讓りてより

遂飡周粟 「遂に周の粟を喰ふ」

下亭漂泊 下亭に漂泊し

阜橋羈旅 阜橋に羈旅す

楚歌非取樂之方 楚歌は樂しみを取るの方に非ず

魯酒無忘憂之用 魯酒は憂ひを忘るの用き無し

追爲此賦 追ひて此の賦を爲りて

聊以記言 聊か以て言を記す

不無危苦之辭 危苦の辭無きにあらざるも

唯以悲哀爲主 唯だ悲哀を以て主と爲すのみ

私は「南山の雨に濡れる」ことを畏れていながら、

忽ち西魏の朝廷に向いてしまった。

やがて西魏は国を北周に譲り、

ために私は「周の粟を食らう」ことになった」

それまで（建康からの逃亡中）下亭に漂泊し、

阜橋で宿を借りるなど苦勞をしたが、

故郷の「楚の歌」も慰めとなるものではなく、

「魯の酒」も薄くて憂いを忘れる役には立たなかつた

そこで昔を振り返つて此の賦を作り、

いささか思いを書き記すことにする。

危苦を嘆く言葉も無くはないけれど、

悲哀の情を述べることを主としている。

此の賦には「危苦」を嘆く辭も無くはないが、ただ「悲哀」の情を主としている、と言う。その「悲哀」の情には、「慙愧の念」「北周に仕えた恥辱」、「北周における己の境遇」そうして「望郷の思い」が、全ては亡國の故として込められていたのであるう。今は遙かなる存在となつてしまつた江南の地に寄せる思いは尽きることはない

く、庾信は獨り北の地に在つて遙か故郷を望み、亡国ゆえの「悲哀」を詠い続けていた。

この度は、北遷後における庾信の「心情の表現」について、「清新」なる發想とその表現と思われれるものをつとりあげたが、更に引き続いてそれ以外の、たとえば山水自然の描写、日常の生活、また典故の使い方などにおける「清新」なる表現について見ていかなければならない。また「清新庾開府」の對の句「俊逸鮑參軍」は、同様に鮑照の詩の發想と表現についての指摘であるが、「俊逸」という評についても「清新」の場合と同様の確認が必要であらう。

注

(1) 杜甫は「春日憶李白」詩のほかに、蜀での作「戲爲六絶句」(戯れに爲りし六絶句)において、

庾信文章老更成 庾信の文章は老いて更に成り

凌雲健筆意縱橫 雲を凌ぐ健筆意は縦橫

と詠っている。おそらくこれも庾信の「清新」なる發想と表現に関して言ったもので、具体的には「擬詠懷詩」「哀江南賦」などのことを杜甫は考えていたのである。

(2) 「清新」の例は、陸雲「與兄平原書」の他に次のようなものがある。

・陸機陸雲別傳(『文選』任昉「爲蕭揚州薦士表」李善注)

雲亦善屬文、清新不及機。而口辯持論過之。

・梁、任昉「爲蕭揚州薦士表」

辭賦清新、屬言玄遠。

・梁、蕭統「宴蘭思舊詩」

孝若明山賓 信儒雅、稽古文敦淳。

茂治到洽 實俊朗、文義縱橫陳。

佐公陸 持方介、才學罕爲隣。

濯蔬 殷芸 實溫雅、摘藻每清新。

・梁、元帝「莊嚴寺僧旻法師碑」

法師道蕩二儀、德充四海。含春秋之生長、抱日月之貞明。

辭旨清新、置言閑遠。

(3) 『文心雕龍義證』には、陸機の「清新」について次のように解説する。

蒙混則不清、有陳言則不新。既不清新、遂致蕪雜冗長。

陸之長文、皆能清新相接、絕不蒙混陳腐。故可免去比弊。

これによれば、「清」は、蒙混でないこと、「新」は、陳腐でないこと。すなわち、表現せんとする対象が正確にとらえられていて「蒙混」でなく、表現が新鮮で「陳腐」でないこととする。

(4) 陸機「漏刻賦」(『藝文類聚』卷六八引)

偉聖人之制器 聖人の器を制するを偉とし

妙萬物而爲基 萬物をして基と爲さしむるを妙とす

形罔隆而弗包 形は隆しとして包ねざるを罔く

理何遠而不及 理は何ぞ遠しとして之かざらん

寸管俯而陰陽效其繩 寸管は俯して 陰陽は其の繩に效ひ

尺表仰而日月與之期 尺表は仰ぎて 日月は之と期す

玄鳥懸而八風以情應 玄鳥は懸りて八風は情を以て應じ

玉衡立而天地不能欺 玉衡は立ちて天地 欺く能はず

既窮神以盡化 既に神を窮めて以て化を盡し

又設漏以放時 又た漏を設けて以て時を放ふ

* 以上、聖人は優れた働きを備えた諸々の機器を作った

こと、漏刻も其の一つであることを述べる。』

爾乃挈金壺以南羅 爾して乃ち金壺を挈りて以て南に羅ね

藏幽水而北戢 幽水を藏して而して北に戢む

擬洪殺于編鍾 洪・殺を編鍾に擬へ

順卑高而爲級 卑・高に順ひて級を爲す

激懸泉以遠射 懸泉を激して以て遠く射て

跨飛塗而遙集 飛塗を跨ぎて遙かに集む

伏陰蟲以承波 陰蟲を伏して以て波を承け

呑瀉流其如挹 瀉流を呑むこと其れ挹むが如し

* 以上、漏刻の形態、構造について述べる。』

是故來象神造 是の故に來るや神造に象り

去猶鬼幻 去るや猶ほ鬼幻のごとし

因勢相引 勢に因りて相引き

乘靈自薦 靈に乗じて自ら薦む

口納胸吐 口より納め 胸より吐き

水無滯咽 水は滯咽ること無し

形微獨繭之緒 形は獨繭の緒よりも微なるに

逝若垂天之電 逝くや垂天の電の若し

偕四時以合最 四時を偕へて以て最を合はせ

指昏明乎無殿 昏明を指して殿無し

籠八極于千分 八極を千分に籠め

度晝夜乎一箭 晝夜を一箭に度る

抱百刻以駭浮 百刻を抱きて以て駭く浮び

仰胡人而利見 胡人を仰ぎて見るに利し

* 以上、漏刻の精密な機能について述べる。』

夫其立體也簡 夫れ其の體を立つるや簡なるも

而效績也誠 而も績を效すや誠なり

其假物也粗 其の物を假るや粗なるも

而致用也精 而も用を致すや精なり

積水不過一鍾 水を積むこと一鍾に過ぎず

導流不過一筵 流れを導くこと一筵に過ぎず

而周天者因其敏 而れども周天の者は其の敏に因り

分地者賴其平 地を分つ者は其の平に賴る

微聽者假其察 微聽の者は其の察を假り

貞觀者借其明 貞觀の者は其の明を借る

攷斗麻之潛慮 斗麻の潛き慮りを攷へ

測日月之幽精 日月の幽き精を測る

信探蹟之妙術 信に探蹟の妙術なる

雖無神其若靈 神無しと雖も其れ靈あるが若し

* 以上、漏刻の神靈なる働きについて述べる。

(傍線部は、陸機の作った語か、新たに手を加えた語である

う)

(5) 吉川幸次郎『杜甫詩注』第二冊

(6) 「梁末における庾信」(「中國中世文學研究」48)

(7) 「三年囚於別館」—庾信は四二歳の時、西魏の江陵侵攻

の直前、すなわち元帝の承聖三年（512）に元帝の勅使として長安に向かったが、西魏の侵攻によってそのまま拘留された。江陵陥落の後、西魏への出仕を求められたが拒否したために「別館に三年囚え」られることになった。「西魏における庾信」（『中国中世文学研究』50）

（8）王褒：「北周における庾信」（『中国中世文学研究』57）

（9）時陳氏、與朝廷通好、南北流寓之士、各許還其舊國。陳氏乃請王褒及信等十數人。高祖唯放王克、殷不害等、信及褒、並留而不遣。尋徵爲司宗中大夫。（『北周書』庾信傳）

（10）「和宇文内史春日遊山」

遊客值春輝、金鞍上翠微。風逆花迎面、山深雲湿衣。

遊客 春の輝きに値ひ、金鞍 翠微を上る。

風は逆ひて花は一面を迎へ、山は深くして雲は衣を湿らす。

「詠畫屏風」二

殘絲繞折藕、芰葉映低蓮。遙望芙蓉影、只言水底然。

殘絲は折れたる藕に繞り、芰の葉は低れし蓮に映ゆ。

遙かに望む芙蓉の影、只だ言れ水底より然ゆるかと。

「奉和趙王喜雨」

白沙如湿粉、蓮花類洗杯。鷺鳥洒翼度、湿雁断行來。

白き沙は粉を湿すが如く、蓮の花は杯を洗ふに類たり。

鷺く鳥は翼を洒して度り、湿れし雁は行を断ちて來る。